

<p>上演1</p> <p>2025年7月26日（土）1校目 関東ブロック（千葉）</p> <p>市川学園市川高等学校</p> <p>『ばれ★ぎやる』</p>	<p>第49回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第71回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員 北海道根室高等学校 中澤 美緒</p>
---	---

幕開きから舞台の中央には不自然にスクワットをする3人。中央には派手なピンクのユニフォームに金髪の女子--ギャル。彼女の両脇にいたのは、マネージャーであるギャル男達。彼らはスクワットをしながら儀式のごとくギャルのメイクをしていく。自由が校訓の原宿苑高校バレーボール部は全員がギャルなのだ。ピンクや金髪に、ツケマ、チークと完璧なメイク。SNS映えにもアンテナを張る。バレーもギャルも、全力を尽くす。それが、バレギャルである。一方で、元祖バレギャルである母の勧めでバレギャルとなつた元川は、部員たちとのギャップに悩んでいた。強さとは何か？ギャルとは何か？について思い悩む。しかし、部員や顧問といった仲間がいたことで、彼女は一步ずつ成長していく。そして、自身の殻を突き破るのだった。

最藤や母、元副部長の阿部と彼女を取り巻く人間たちは、自分とは違い、精神面的にも強い者ばかり。強さに囚われ、弱さから目を逸らし、それでも母の背中を追い続ける元川。仲間との絆、自分自身と向き合い成長していく姿に観客である私たちもエールを送りたい気持ちになった。また、実際の試合ながらの手に汗握る展開に目が離せなかった。自分らしさとは何か、正義とは何かについて考えさせられた。特に、後者について印象的だったのは審判の存在だ。自由は公序良俗に沿うものに限るのだとバレギャルたちを徹底的に否定し、利己的な正義を押し付ける。だが正義とは、自分の中から自由に見つけるもので、他人に押し付けられるものではない。周りの圧力に屈せず、自分らしさを武器にすることはとても難しいことだと思う。それでも、他者に曲げられることのない自分らしさを手にした元川の姿に、私たちも勇気を貰った。

講評委員の中からは、なぜバレーとギャルなのかということが話題に上がった。バレーは、ラリーでボールを繋げて、力強く相手コートに打ち込む競技であり、仲間との信頼関係が試される。ギャルもまた、自分の信念を強く持ち、自分と仲間、どちらも信じることで、強くなれる。一見、異色の組み合わせとも思える2つが融合することで、観るもの的心を揺さぶる唯一無二の青春ストーリーとなったのではないだろうか。

そんな舞台上で繰り広げられるバレーの演出も素晴らしい。舞台は味方と相手のコートを前方と後方に分けられる。さらに後方に段差を付けることで、互いの選手の洗練された動きに目が釘付けになった。全員が正面を向きながらも見えないボールを追い、連携して思いとボールを繋いでいく。そんな白熱した試合が舞台上に繰り広げられていた。

こういったバレーの試合の他にも、本作は劇や観客を盛り上げる仕掛けがふんだんに盛り込まれている。華やかな歌やダンス、上着をはためかせることでスピード感を体現したタイムスリップシーン等々、型にはまらない面白さも大きな魅力だった。このハイテンションな世界に客席では多くの笑い声、手拍子が響いた。

終始楽しい作品だったことはもちろん、唯一無二の「自分らしい強さ」を見つけた元川とバレギャルたちの成長に、爽やかな情熱が心に燃え滾る作品だった。

